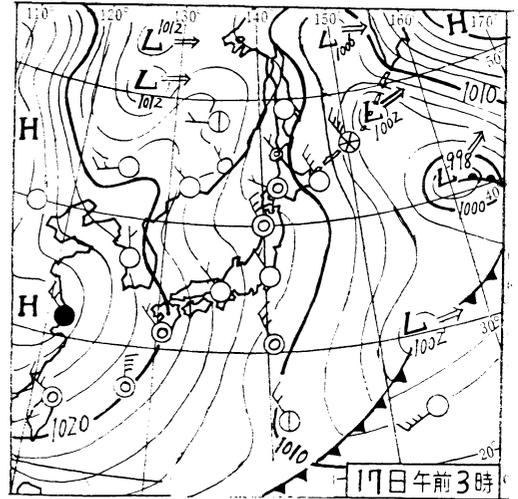
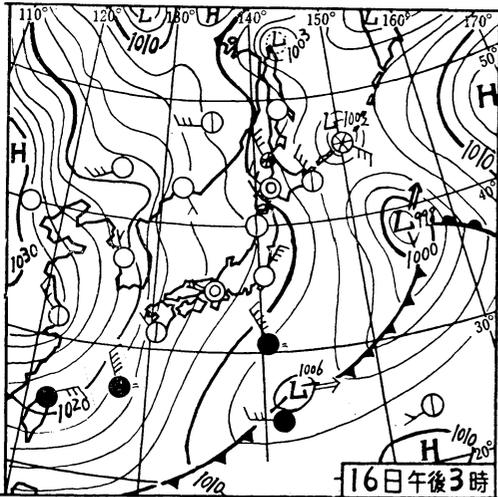


第2図 a



第2図 c



第2図 b

日時 { 15th20h~16th04h
16th13h~16th17h
17th02h~17th04h

当時の気象、海象状況と記事は第1図、第2図a, b, cをまた航跡と気象は口絵の図を参照されたい。

3. 沿海州沿岸の海氷状況

沿海州のシホト山系の北端付近にあるソビエツカヤガバニ(地名)南方約90kmの海上(N48°03' E140°34')は緩氷縁となり、しばらく陸の方に向かって進むに従い、直径1m~2mの『はす葉氷』が多くなる。なおも数十分、この氷域を押し分けて奥の方に入ると板状の薄い1冬氷(厚さ10cm~15cm)となり、船は前進がやや困難になった。これから先への前進は中止したが、幸い視界の利く良い天気のため船首(330°)前方には海岸まで続くかのような板状の氷野が望みされた。9時にこの位置から一端南下し、その後14時ころから再び船首を北東に向け、樺太の久春内の西岸(N48°09', E141°32')約100kmの位置で再び前述のものとはほぼ同様な氷縁に突き当たり前進を阻まれ、折り悪しく夕暗が辺りを包むようになったため、奥の方の状態はよく確めるまでには到らなかった。なお、氷縁域に入る手前の海面では、気象的には着氷が発生してもよい条件に当たっていたが、波浪が立たず、割合穏かなため着氷現象は見られない。またこの氷縁域に入る手前の海域で操業中の2, 3隻の中型日本漁船に出会ったが、船の動揺が少ないので割合楽に操業していられるのではないと思われた。

ただし、領海侵犯と海氷の動向には絶えず監視の要がある。

過ぎ期待したほどの着氷は見られなく、350トンの巡視船に約19トン、すなわち5%強の着氷量に終わっている。しかし100トン未満の漁船の場合は風浪による動揺も大きく、甲板に上がる水しぶきも多くなるので着氷の割合はもっと増加するものと思われる。船体上での分布は、上甲板、舷牆、手摺、などが大半を占め残りが甲板室、甲板上艤装品となる(口絵参照)なお着氷が発生成長した海域と気象状況の概略は次の通りである。

海域 { N46°45'~N47°45'
E141°35'~E140°35'

風向, NW~NNW, 風力5~6, 気温-7°~-13°C
水温+1.0°~-1.5°C